

東山中 3年
米津 和

石川部平 ~3年間のまとめ~

動機 中1の夏身近な歴史を調べてみようと思い立ち、自宅のすぐそばにあった「石川部平君碑」と刻まれた石碑について、市の図書館の史料をもとに調べた。

中2の夏 石川部平の子孫の方が石川部平について書いた「帰鶴」という本を取り寄せ、読み解き、調べた。中学生の私では資料集めは困難を極め、このテーマで続けるのはそろそろ限界かな、と諦めかけていた。

中2の冬、安城市歴史博物館についての記事が目にとまり、鳥肌がたった。「石川部平」にスポットを当てた展示会の紹介文だった。心踊らせ出掛けると、展示内容はとても詳細で、深く掘り下げた内容だった。2年間調べて見つけた点と点が1本の太い線となって石川部平の人生をつなげてくれた。

中3の今年、展示会で購入した資料をもとに、部平の出生・家柄から後生まで、特に里の教育に関わるあたりをより掘り下げてまとめることにした。また、その展示会では、偶然「帰鶴」の作者・伊東麻由美さんにお会いできた。直接、部平さんのお人柄・思想についてお聞きすることができた。今回はその内容ものをせる。さらに、その展示会を企画してくれた学会員の野上真由美さんに、中3の夏、改めてお会いし、相談しうかがった内容を取り入れてまとめる。

部平を取りまく環境 <水戸藩派閥の変遷>



- 門閥派-名門の上級武士
- 天狗...門閥派から見たらや中・下級武士が少し学問を修めたから「天狗になってるぞ」の意味。
- 鎮派...石川部平所属
- 弘道館諸生=学生

天狗 (本圖寺派)

戊辰戦争により、京に残留していた本圖寺派が帰国。藩の実権を握ると、諸生党の肅清を開始する。諸生党だった部平は身の危険を感じ、逃亡。

諸生

諸生党として戦いに参加したが、門閥派は実権を握ると、鎮派はしません。下級武士であり、藩政改革派として肅清。部平、2度投獄。鎮派と門閥派は戦いの為だけに手を組んだ。



水戸出身の洋画家
五百城文武が描いたとされる
石川部平の肖像画。



屋敷跡地に
残る石碑。
この石碑が
研究の
1ポイント。



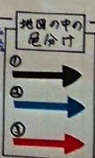
里村の庄屋である野山惣平、組頭である押切平らら、部平に「斗山の屋敷は不便があるから」と里村本郷内に新しく家を作り、移り住むよう提案し、新居完成までは西方寺の庫裏で生活するように手配した。この資料には、明治6年9月11日に部平が家族と移り住んだ字御地蔵の新居の位置を記している。部平と里村の人々との関わりがわかる。

<年表>

赤... 国内外の関わり
黒... 部平に関わる

1831	天保2年	常陸国谷河原村(茨城県常陸太田市)水戸藩郷士篠原家に、長男として出生。幼名:音五郎
1846	弘化3年	石川家の養子に。部平は篠原家の長男。部平には弟がいる。本来、長男が家を継ぐものだが、篠原家は学問好きの部平より、体を動かして働くのが好きな弟を選んだ。親類にあたる石川家と部平は学問好きで、うまが合い養子に請われたと思われる。部平の養父も、昌平坂学問所で学んでいる。
1849	嘉永2年	改名:友太郎, 本名:忠和。水戸の藩校・益習館や郷士加倉井砂山の日新塾で学ば、藤田東湖に師事。
1853	嘉永6年	ハリー来航 家慶<12代将軍>死去 家定<13代将軍>就任
1855	安政2年	江戸昌平坂学問所で学ぶ。
1858	安政5年	井伊直弼(彦根藩主)大老就任 日米修好通商条約に調印(無勅許) 家定<13代将軍>死去, 家茂<14代将軍>就任 安政の大獄
1859	安政6年	幕府より命が下る(慶喜隠居・謹慎, 斉昭国許永墜居)
1860	安政7年	桜田門外の変<大老・井伊直弼暗殺> 斉昭死去
1864	元治元年	天狗党の乱、始まる。<藤田小四郎ら激派、筑波山で拳兵> 石川部平は諸生党に加わり、仲間と農兵663人率いて水戸城下仙波原で戦闘に参加。 (部平が戦いに参加したのはこの一回のみ。ドラをたたいて相手をびくつかせるといふ役割りだった。そのため、部平自身は人を切ったりしていない。だが、ドラに驚いた相手が逃げた先でしゅうけきにあい、かなりの人命が失われたことで、戦いに嫌気がさし、その後は戦いに参加しなかった。)
1865	慶応元年	部平、天狗党が京へ向け西上したことで、門閥派に捕えられ入牢。(閏5月~9月8日)
1866	慶応2年	再び投獄(6月中旬~翌3年10月) ← 門閥派の市川三左衛門らが藩の史書を握り、激派をけでなく、 鎮派も肅清。諸生党として共に戦ったのは、ほんの一時。尊王攘夷派は、門閥派から見ればしよせん中・下級武士のなりあがりもの。この2つの派閥は藩内で長年しよせん権力争いをし、どうしのいがみあいを繰り返していた。一時期、共に戦っていても、同志という意識はなし。鎮派も肅清の対象になり、部平も2度も投獄された入牢者の扱いは悲惨で環境劣悪。七くなる者も多かった。 *ドラをたたいただけで、相手を切ったりしていない。部平が2度も投獄に至ったのは、農兵を663人も集めとりまとめ、その長として農兵を率いた事が重罪として扱われた。
1867	慶応3年	明治天皇即位
1868	明治元年	戊辰戦争の始まり<旧幕府軍敗走>。激派の中の本園寺法が京より水戸に帰国。藩の史書を握り、天幕と称し、諸生党(鎮派と門閥派)を肅清開始。 部平、身の危険を感じ、水戸を脱出。石川家、家名・田宅没収。

- 部平の逃避行の行程 (下の地図の説明) ※ 途中の家族からの手紙で藩内へ情報を受けついで逃げ、逃げすべしと知らせる。逃げた先は、藩内へ知らせる。逃げた先は、藩内へ知らせる。
- ① 水戸からの脱出<慶応4年3月16日~明治元年11月18日> 谷河原村から手園鉄山まで
 - ② 手園鉄山からの脱出<明治元年11月19日~明治2年5月22日> 手園鉄山から仙台
 - ③ 仙台から福島<明治2年5月23日~(明治2年7月5日~8月4日再び仙台へ)>





部平の逃避行の行程の地図

先祖代々石川氏家譜 五冊之内第四



「石川氏家譜」は、明治2年3月に石川部平が里村でまとめた石川家の系図や自身の半生を記した全5冊の記録である。ここでは、部平が慶応4年3月に

水戸藩を脱出し、奥州に逃れ逃亡生活を行ったことが記されている。部平は、天狗党の乱の原因と自身が参加した元治元年2月11日の仙波原の戦いの様子を記している。この時、重原(以後)は、この問題視を二度投獄され水戸を離れ、

1868	明治元年	新政府軍、江戸城入城(無血開城) ※この地域は尾張藩の判断に従うのみ。新政府軍に逆らなかつた為、幕末の混乱は特になかった。 福島藩「奥羽越前藩同盟」に加盟 福島藩降伏(藩主、板倉勝尚) 福島藩家老、波川教之助が福島藩家督を相続(改名、板倉勝彦)
1869	明治2年	福島藩重原へ転封(2月以降家臣地位) 福島藩の丹治経緒家で部平は「銀閣」という偽名で「青藍塾」を開く。
1870	明治3年	重原藩士から、重原藩への士官の話が舞い込む。藩主、板倉勝彦と直接面会部平の過去を承知の上で、徳川の教への起源である漢学に造詣の深い部平に藩の発展の為、協力と、と強くこわれた。五人扶持として雇われ、藩校一等教授に任命された。重原藩士となり、部平と改名。福島から重原への道中、部平の母方の叔祖父、高塚隆泰の家身を寄せていた孝一良と息子徳太郎と江戸で三年ぶりの再会。感無量の喜び。そして一緒に重原に向かった。
1871	明治4年	里村字一斗山に柳り住む。
1872	明治5年	藩校、養正館の教頭、一等教授に任じられ、教育制度の改革に意欲的にとり組む。学制公布をうけ、西方寺内に「仁里学校」開設。
1873	明治6年	制度改まり「第二大学区第7中学区第20番里村学校」と称す。部平は教員として指導する。庄屋名主「野山惣平」組頭「畔柳経平」らから、一斗山の部平の家を頻りに訪れ親交を深めるうちに、便が悪い。もっと便の良い本郷に家を建て、柳りよう進言。家が建つまでは西方の庫裏に借住まい。家が完成し、引越す。=石石碑が立っているところ。
1874	明治7年	私塾「青藍塾」を開く。区は西方寺内仁里学校で教員として幼少の指導。夜間は青藍塾で青年の教育。区庫の労をいとわず人材の育成に専念。
1877	明治10年	茨城県への一時帰国を果たした。
1878	明治11年	同崎へ塾を移転。部平の自宅で行っていた家塾は、部平の引越して閉鎖。里村にあった青藍塾で蒸陶を受けた人々 <鈴木長四郎(教育家)> <伊吹武市(教育家)> <田中純平(八十年代病院の前身である、田中病院を開設)>
1879	明治12年	古籾家に招かれ、田口村(北設楽郡設楽町)へ、青藍塾移転。
1881	明治14年	家族と故郷の茨城県久慈郡谷河原村(茨城県常陸太田市)へ帰郷。定住。青藍塾を開く。
1903	明治36年	72歳の時、中風(脳こうそく)を患う。7年の闘病生活の後、79歳で自宅へ死亡。

青藍塾

～青は藍より出でて藍より青し～

- 意味： 学問は努力を怠らず終生継続して修めなければならぬ。 転じて、学問の分野で弟子が師匠の学識や技術を越える。
『弟子』『蒼学編』の冒頭の一節からできた故事成語。
吾平が教えた水戸藩士・藤田東湖の私塾も「青藍舎」。
 - 始まり： 1867年、福島潜伏中「銀閣」という偽名で開いた。
1874年、鹿藩置県により藩校・養正館、不振。里村御地蔵の館で開く。(部平は44歳)
 - 塾則： ① 高等小学校卒業が条件。 ② 3年で修了。
 - 科目：
 - ・ 国史略
 - ・ 十八史略
 - ・ 論語
 - ・ 博物新論
 - ・ 地球説略
 - ・ 英国史
 - ・ 仏蘭西誌
 などの、従来からの漢学が中心として教えられていた。
 など、新時代に対応する科目も加え、教えられていた。
- ※ 当時、私塾は主に塾長一人が教えていた。そのため、新時代に対応する科目を、部平はすべてに修得していたと思われる。本当に勉強家なのだと改めて感嘆。また、当時の私塾は塾生も自ら学が、塾は主に議論の場として使われることもあった。
- 私塾の役割： 時代にほんろうされ、定着しない中等教育を代位し、教育だけでなく、地域の知識人層も育った。

部平と里との交流

部平が里村に在任したのは、わずか5年半程。しかし、薫陶を受けた人々の多くはこの地域の発展に大きく貢献した。教育者だけでなく、医師、政治家、官公使など。また、部平の人柄により、里村の人々に親しみと敬意をもって迎えられる。在屋名主や組頭と深く親交し、里村御地蔵に家を建ててもらい厚遇された。親交が深かった人達の石碑は今も大切に残されている。石碑めぐりをしてみても改めて部平が里と深く関わっていた事を実感した。それらの石碑は私の生活圏の中にあり、日々頻繁に使う道路や公園や駐車場の側にあった。改めて、部平の存在がより身近に感じられた。それらへの石碑の人物と部平との関わりを写真と共に紹介する。

野々山惣平

庄屋名主。部平に里村本郷に移る様進言し、村中の人に協力を請い、部平の家を建てた。人柄がよく有能な人物。34歳の若さで組頭。44歳で庄屋に。幕末動乱期を村方役人として精励格闘。藩主・板倉家から金2両与えられ賞された。若い頃から職を去ってからも長く寺子の指導にあたり、教育の発展に尽くした。石碑の碑文は、青藍塾の塾生「鈴木長四郎」が碑文の添削を部平に依頼した。

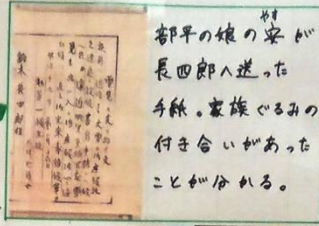


部平が添削し、鈴木長四郎へ返信した手紙。



鈴木長四郎

青藍塾、塾生。里学校教員を長く勤めた。都平が茨城に
任んでからも、家族ぐるみで親しく付き合い書簡を
交わし続けた。また、庄屋名主・野々山惣平の石碑文作成では
都平に添削を依頼している。誠には温厚な性格で、学問を
心より愛していた。長四郎を賞える石碑文の中に石川吾平のもと
経史を修めた。と記載があり、都平からの大きな影響を受け、
都平の事を生涯「師」とあおき続けた様子をうかがい知る事が
できる。石碑は門人140名で建立とある事からも、長四郎自身、
教育者として長く、多くの門人に慕われ続けたことが分かる。



都平の娘の安が
長四郎へ送った
手紙。家族ぐるみの
付き合いがあった
ことが分かる。



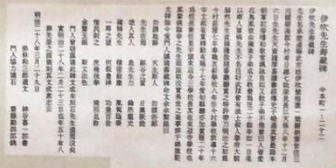
畔柳縫平

組頭として庄屋名主・野々山惣平らと共に吾平の里村本郷への物産に
尽力。無欲で能筆な人物。書風は清妙流麗で他村からも弟子を希望する
者が多かった。縫平が45歳の時に、師の徳を称えんとする弟子達が大きな寄附を
建てた。石碑文は、後の八千代病院となる田中病院を創設した田中純平が撰。



伊吹武市

青藍塾、塾生。1877年、都平が茨城に一時帰郷した際、都平の長男
徳太郎と共に、塾生23人の内の一人として都平を見送った人物。教育者。
明治6年10月1日、学制の発布を受け、そのまま専ら寺に設けられていた
学校を「第二大学区第七中学区第二番小学今村学校」と称し、伊吹武市が
専ら教育の任にあたった。明治20年、小学校令の公布(明治19年)により
義務教育年限4年、学区の統廃合、実施。来迎寺には、来迎寺尋常小学校
建設。開校の際、校長就任。明治25年8月1日、今村尋常小学校
(今村コミュニティーの所在地)が開校した際、校長に就任。今村尋常小学校の
建築委員には、後の八千代病院になる田中病院を創設した田中純平もいた。



石碑の裏の
石碑文。

田中純平

青藍塾、塾生。1877年、都平が茨城に一時帰郷した際、都平を見送った
1人。現在の八千代病院の前身である田中病院を創設。明治4.5年頃
には、栄福寺で私塾を開き、村の子供に習字を教えた。
地元の教育にも深く貢献し、明治25年、今村尋常小学校設立の際は、
建築委員に名を連ね、尽力した。また、都平が里村後地蔵に物産
する事を進言、尽力した組頭で書家の「畔柳縫平」の碑の石碑文を
作成している。



「帰鶴」を編著した伊東麻由美さんに伺った話

部平さんは、麻由美さんの高祖父。麻由美さんの祖父の祖父。部平さんと民さんの娘である安さんは、麻由美さんの曾祖母。麻由美さんは、部平の帰鶴物語を研究。今も、部平が友人に出した多くの書簡を調べている。

そこから伺い知ることのできるのは、部平が『平和主義』だった事。日清・日露戦争を批判し、『日本は幕末から明治にかけての戦さだけで飽きたらぬのか。あれだけ多くの血を流したのに、また血を流したいのか。』と、平和を愛した部平だからこそ、迷せし、諦める事なく生きながらえ、家族と再会をはたし、79歳という当時としてはかなりの長寿をまっとうできたのでしょね、と私に話して下さいました。また、部平さんにはせくなつた後も武勇伝があり、部平さんがせくなつた7年後に妻・民さんを土葬する際、お墓を掘り起こしたところ、吾平さんが完全な形でミイラとして残っていたの。角少鼻が欠けていたものの、白髪もそのまゝ風にながらっていたそうよ。

親戚一同「さすが部平さん」と皆、心より納得したそうよ、と。さらに部平一族は長生子の家系で、特に女性が長寿の為、麻由美さんのおばさんも百歳をこえて、生きたよ、と。元の方の写真も見せて頂きました。

幕末から明治という激動、2度の投獄や、逃亡生活の苦しさ、厳しさに耐え、79歳まで長生きさせた部平さんは、元々丈夫な方なのだろうけれども、清い精神状態で常に学ぶことを怠らず、未来と未来を担う子弟の教育に心から尽力されたからこそ長生きされたのだろうと私も思いました。



百歳をこえて長生きされた麻由美さんのおばさんの写真。(下の方)



「帰鶴」の作者、伊東麻由美さんと。歴史博物館の展示会にて。



学芸員 野上真由美さんより伺った話



学芸員の野上真由美さんと、催された相談会にて。

- ・部平さんのように苦節した人は全国に本当にたくさんいた。
- ・ただ、この安城でいうと、水戸藩ほどの混乱はなかった。家康がいた岡崎や、家康の生母がいた刈谷など幕府にとっても近しかった。また官軍が江戸へのぼる際、尾張藩の英断により官軍に逆らわなかった為、血を流すことはなかった。幕府崩壊150年の節目の年として展示会を催す際、激動にまきこまれた人物は安城には少なく、探し出した人物の一人が部平さんだった。
- ・太平洋戦争で日本は敗戦。新たに新憲法・新民法が制定されたが、それまではそれそれの旧藩での身分が重要だった。なので部平さんは重原藩では戸籍も回復し、上級に取り立てられたが、水戸藩での戸籍回復を長年強く望み、明治31年にも水戸藩に石川家再興を願う書簡を出していた。(後に、孫をもって無事再興をはたす)
- ・また、自由研究を部平さんと里のつながりにスポットをあててまとめる良いビデオにもハイも頂きました。

まとめ

身近な歴史調べとして、家から見える「石川部平墓碑」を調べ、読みがな知らずに初めた研究だった。図書館で多くの史料を借り、石川部平の史実を探ることに本書の空想を見つけたように、ワワワレ。『青雲塾』『水戸藩士』など17の情報をつかみ、点と点を繋いで本の様で部平の人生を木口つなげていった。中々の歴史研究も時点を軸に安城に行けば何か情報が見つかるだろうかと、そうこゝから以上は無理かなと諦めかけていた時、歴史博物館で部平を扱った展示を一通り見ると世界が広がった。手塚子孫と作者の伊東麻由美さんとも展示会で出会い、とても感激した。出版社に手紙を書けば伊東麻由美さんに届けてもらえるだろうかと、なぞを尋ねていた矢先の出来事だった。いくつかの奇縁的な出会いにより、石川部平という人物の人生を一本の太くて強い線が結ぶことになった。3年間の研究で、私の脳裏に「一期一会」という言葉が浮かんで来た。史料としての一期一会、ゆかりの人の一期一会。会いたい、出たいと願う程で、実はおと前から視界に入っていた石碑ばかりだった。部平ゆかりの人物碑。こんな身近な生活圏の中での出来事だ。私が見つけたいのを見つけた。おと前より探していた何となくの縁も、ゆかりの人の縁も持つと、何かの縁でつながる。縁も同じなら、解かに教科書に書いてあるものが興味を呼び起こすほどに、世界は広がり、理解と理解が重なった。3年間の研究を通して、私はこゝから多くの方に、勉強がけでなく身の回りのこと、世界でおこっている事、何にでも興味をもち、調べていこうと思ふ。静かに立っていた石川部平が今では私に平和の大切さや勉強の大切さを語りかけてくれる。これから部平さん探し、部平さん調べは続けないこうと思う。

＜参考文献＞

- ・特別展 幕府崩壊 -幕末維新の生きた地方の証言たち- 資料集
- ・安城の石造物~安城の歴史を学ぶ会編~
- ・水戸藩士 石川部平が駆け抜けた幕末維新 「帰鶴」 (伊東麻由美、編著)
- ・新編 安城市史3 通史編 近代
- ・里千年史

